

問いづくりと問いへの応答で子どものよさを引き出す道徳授業

主張

道徳の学習において、道徳的な課題を自分事と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」への転換が求められている。しかし、これまでの私の実践を振り返ると、教材の場面理解や心情理解にとどまった授業が多く、教材の道徳的価値の理解（価値理解、人間理解、他者理解）までは考えを深めさせることができなかった。

道徳的な課題を自分事として捉えることができるよう、子どもが問いづくりを行う。その問いへの応答で子どものよさを引き出し、道徳的価値の理解を深めたり他者との交流をしたりして「考え、議論する道徳」を行うことができ、深い学びに繋がるのではないかと考える。

1 研究主題設定の理由と手立て

特別の教科道徳では、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子どもが自身の問題と捉え向き合う「考え、議論する道徳」へと転換を図ることが求められている。

これまでの私の実践を振り返ると、教材を読み、教師が用意した問いについて考えたことを交流する授業展開が多かった。しかし、教師の用意した問いでは、子どもが、教師が答えてほしい答えを探し、道徳的課題を自分事として捉え切れていなかった。そのため、場面理解や心情理解に留まったものとなっていた。また、私の発問も場面理解や心情理解に留まるものが多かった。教師に言われたから考えるという道徳の授業から、子どもが問いづくりを行い、子どもの話してみたい、聞いてみたいという主体的に学ぶ意欲、子どものよさを引き出し、課題を自分事として捉えること（自分だったらどうするか、自分の経験と関連して考える等）ができ、深い学びとなるのではないかと考える。個人で作った問いを基に応答し、話をしたい聞いてみたいと思える場を設定し、互いに学び合う、協動的な学びを価値付け、深い学びへと繋げていきたい。

そこで、①事前に教材文を読ませ、問いづくりを行わせること。②対話的な学習を進めるために、ICTの活用や交流の工夫をし、その問いへの応答を通して、様々な考え方や感じ方に触れさせる。以上の2点を行うことで、「みんなでもっと考えたい。」「話してみたい、話を聞きたい。」という、主体的に学びに向かう子どものよさを引き出すことができ、「考え、議論する道徳」を行い、深い学びへ繋げることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究仮説

道徳の授業において、子どもが問いづくりを行い、その問いへの応答をすることで「考え、議論する道徳」となり、道徳的な課題を自分事として捉え考えを深めることができるであろう。

3 研究内容

- (1) 対象 佐渡市立相川小学校 3年生 12名 令和5年度
佐渡市立相川小学校 3年生 14名 令和6年度

- (2) 研究内容と検証方法

・毎時間の道徳の授業を同じ流れで進める。

①問いづくり

教科書を読んだだけでは答えを見いだせないものを問いとすることを、道徳の授業開きの際に確認する。子どもが家庭で教科書を読み、みんなで考えたいこと、読んでいて気になったことをタブレット端末で入力し、ミライシードに提出する。資料1

②問いへの応答

問いを基にして考えの交流を行う。事前にミライシードに問いを提出するため、子どもが、誰がどのような問いをもっているのか確認することができ、授業でどのような話し合いになるのか、誰と考えを交流したいのかをイメージしやすくなる。提出された問いは、教師が似た内容毎にカテゴライズする。授業中は電子黒板に表示しておく。ペアでの対話、全体での対話の際は、教師が介入し、問い返しや追発問をしたり、子どもの発言が分かりやすいように板書に整理したりする。心情メーター等の思考ツールを活用する際は、ミライシードのオクリンク機能を活用する。

答えを探すだけの応答ではなく、新たな問いにつなげたり、問いを問いで返したりする姿を期待する。

③振り返り

自分の問いに対する答えと、学習して考えたことを振り返りとして記入する。

(3) 検証方法

子どもの変容や学級集団の学びの様子（つぶやき、発言、記入、振り返り等）から検証する。

4 研究の実際と考察

(1) **実践1** 主題名 本当の友達 友達とより仲良くなるために

実施日 R 5 年 1 1 月

教材名 ないた赤おに 『小学どうとく ゆたかな心 3 年』 光文書院

内容項目 B-(9)友情、信頼

授業の実際

指導案の流れで授業を進めた。(資料2)「赤鬼と青鬼は友達なのか」「なぜ赤鬼は泣いたのか」「青鬼はどうして暴れたのか」の3つを提示した。

青鬼の気持ち、赤鬼の気持ちを考えた後、「赤鬼はこの後、青鬼のところへ行くか」と追発問を行った。交流場面では、心情メーターを使用し、行く(青色)、行かない(赤色)で表現させた(資料3)。A児は「青鬼はどうして暴れたのか」という問いを作っていた。この問いを基に話し合いたいと子どもたちが以下は導入部の話し合いの記録の一部である。

T1:「青鬼はどうしてあばれたのか。」どうしてこの問いを考えたの？

A1:青鬼は赤鬼に頼まれていいもないのに、どうして、自分の印象が悪くなってしまうのに暴れたのか、考えてみたかったからです。

T2:赤鬼は青鬼に相談してたんだよね。何で青鬼はそんなことしたんだろうね。

A2:(赤鬼が村人に)逃げられて可哀そうだと思ったから。

C1:赤鬼に友達がたくさんできて欲しかったから。

C2:二人とも優しい鬼達で、人間と仲良くしたいと思ったから、青鬼は自分を犠牲にして助けたかった。
(中略)

T3:頼まれていないのに赤鬼のためにやったんだね。

C3:助け合いの心。

T4:赤鬼は青鬼に何かした？

A3:していない。まだ自分でお礼を言っていない。

考察

A児は自分の問いを基に話し合った後、「助けてもらった恩があるから、青鬼の所へ行きたい」と心情メーターで表した。最初は青鬼の立場から考えていたが、赤鬼の立場からも考えることができるようになり、良い友達関係を築くためにはお互いが思いやることの大切さに気付き、考えを深めることができた。(下線部)以下はA児の振り返りである。

青鬼は思いやりの気持ちをもって、困っていた赤鬼のために暴れた(問いへの答え)。今日は本当の友だちとはどんな友だちなのか考えました。本当の友だちとは、自分のことだけではなく、たすけあいや思いやりのきもちをもつことが大切だと分かりました。今日のべんきょうしたことを今後の生活に生かしていきたいです。

計18回、子どもが問いつくりをした授業を行った。年度末にアンケートを実施した。

(令和5年度3月実施)

○ 問いつくりは、道徳の時間にみんなで考える事に役立ちましたか？(自分の考えをもつ、友達の考えを知る)

役立った	6人	自由記述 ・みんなの問いを見たら、新しい考えが出てきた。 ・授業が始まる前に、この人の考えいいなと思える。 ・自分の問いで授業が進むとうれしい。 ・友達の問いを見て、考えが変わったことがある
少し役立った	6人	
あまり役立たなかった	0人	
役立たなかった	0人	

(2) **実践2** 主題名 なかまの気持ち

実施日 R6年6月

教材名 ドンマイ！ドンマイ！『小学どうとく ゆたかな心 3年』 光文書院

内容項目 B-(10)相互理解、寛容

授業の実際 資料4

B児は、「なぜこうくんはがんばっているのに、ぼくはおこってしまったのかな」という問いを作っていた。この問いを作った理由として、「こうくんが謝ったのに、許せないのが不思議」と記入した。以下は、初めの「ぼく」の気持ちを考える場面の一部である。

T1：なんでゆるせなかったの？この気持ち分かる？

C1：はい。

C2：確かになんか、自分のチームが負けちゃうと許せない。その人せいで負けるのが嫌。

T2：この試合で負けるから許せないって気持ち分かる？

B1：ぼくはサッカーで、試合でちゃんとやっているのに相手(仲間)が弱くて、負けて悲しかった。

T3：相手ってチームの仲間のこと？

B2：うん。

T4：似たような経験ある？

C3：ドッチボールとかサッカーやっているときに、そっち行きなって言ったのに、行かなくて負けちゃうと許せなくなる。

T5：指示出したってこと？

C4：うん。

B3：うなずく

考察

B児は自分自身の問いに対して、他の子どもの発言を聞き、自分にも似た経験があったことを思い出し、「ぼく」の許せなかった気持ちを理解し、自分事として捉えることができていた。問いへの応答を通して(資料5)

B児は、発言こそなかったものの、話している人の方へ体を向けて聞いたり、うなずいたりしながら応答に集中していた。B児の中で、「自分と相手」以外にも第3者への気持ちにも意識を向け、同じ気持ちのチーム同士、仲良く楽しく行動することが大切だと気付くことができた。(下線部)

以下はB児の振り返りである。

ぼくはかちたい気持ちがあったから(問いへの答え)。今日は、こうくんの気持ちとぼくの気持ちを考えられたので、いいべんきょうになりました。ぼくはサッカーの時に、なかまと楽しくサッカーしたいです。

計6回、子どもが問いづくりをした授業を行った。学期末にアンケートを実施した。(令和6年7月実施)

役立った	9人	自由記述 ・生活の中で自分が考えたことや、友だちの考えとかも、生活で生かしてこうできた。 ・同じ問いの人もあるけれど、ちがう問いがあると、なるほど!となる。 ・その問いの理由を知ると、話が広がって面白い。 ・みんなで、「こんなこといいな」というのを考えたい。
少し役立った	4人	
あまり役立たなかった	0人	
役立たなかった	0人	

5 成果と課題

(1) 成果

- 問いづくりを行い、その問いを生かすことで、道徳的な課題を自分事※として捉えやすくなった。また、その問いへの応答をすることで、子どもの話してみたい、聞いてみたいという主体的に学びに向かう姿、子どものよさを引き出すことができ、活発な意見交流となり、考えを深めることができた。**資料6**

実践1後の振り返り	
道徳的な課題を自分事として捉え、考えが深まった振り返りを書いた子どもの数	8人
感想のみ書いた子どもの数	3人

※自分事として捉えること(自分だったらどうするか、自分の経験と関連して考える等)

実践2後の振り返り	
道徳的な課題を自分事として捉え、考えが深まった振り返りを書いた子どもの数	8人
感想のみ書いた子どもの数	2人

- 2つのアンケート結果より、問い作りが道徳の学習で役に立った(自分の考えをもって授業に臨める、友達の考えを知る)という質問には、全員が肯定的評価となった。自由記述から、問いづくりが話したい、聞きたいといった意欲に繋がると読み取ることができる。
- 子どもの問いを生かすことで、学習に前向きではない子どもも意欲的に参加することができた。また、道徳の授業で学んだことを生活でも生かしていきたいと考える子どもが増えた。**資料7**

(2) 課題

- 子どもの問いを生かすことで、扱うべき内容項目からずれてしまうことがある。子どもの問いを生かしつつ、ねらいに迫る問い返しや追発問など、応答する際の教師の介入の仕方について吟味しなければならない。今後も継続して取り組む必要がある。また、本実践は3年生のみの実践となっているため、他の学年でも検証していきたい。
- 振り返りにおいて感想のみの記述となった子どもに対する支援の仕方、交流の仕方を改めて検討する必要がある。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』2017年
- (2) 浅見哲也・安井政樹『道徳授業の個別最適な学びと協働的な学び』明治図書、2023年
- (3) 島恒生『小学校・中学校 納得と発見のある道徳科 「深い学び」をつくる内容項目のポイント』日本文教出版、2020年
- (4) 田沼茂紀『インクルーシブな道徳科授業づくり 個別最適な学びの実現』明治図書、2021年